

【ポスター発表】

肢体不自由当事者とその家族における「自立観」の相違と変遷（1） －「ナラティブ」を用いたインタビュー調査に焦点を当てて－

○逸見万葉（株式会社リクルートスタッフィングクラブズ・010053）、野崎晃広（四国学院大学・005408）

キーワード3つ：当事者家族、自立観、ナラティブ

1. 研究目的

筆者自身が当事者である事を強みとして障害者の自立観の在り方を研究する事とした。当事者は家族の中で育ち、やがて社会に出ていく事になると考えられる。自立観の研究は当事者、その家族、さらに社会の在り方までをも含めて考えるべきであろう。本研究は、当事者と家族間に存在する自立観が時代の流れとともに変遷を遂げているという立場に立ち、その変遷の一端を明らかにするものである。手法としては、ナラティブを用いた質的インタビューを採用した。なお、本報告ではインタビュー調査の実施状況と結果について述べる事とする。

本報告は、令和5年度四国学院大学大学院社会福祉学研究科に提出した修士論文の一部データを用いたものである。研究倫理については研究計画発表時、および修士論文提出時にそれぞれ社会福祉学研究科全教員による妥当性の評価を受けた。その結果、修士号の学位論文として学位認定を受けた事を明記しておく。

2. 研究の視点および方法

(1) 調査方法

1 インタビュー

研究対象者の募集については、①香川県、愛媛県の自立生活センター（CIL）利用者、②筆者が所属する大学の学部生、③筆者のSNS フォロワー、の3方法を採った。実施期間は2022年6月～2023年7月までであった。対面形式を主とし、オンライン形式も可とした。当時はコロナ禍であったため研究対象者のうち6割はZoomを使用したオンライン形式となった。

インタビューの実施手順は、①当事者と家族のインタビューを各1時間程度別日にて設定、②インタビューイーが語った内容を筆者がホワイトボードに記録、③筆者がインタビューの様子を録画した映像を編集、④編集した映像をもとにした当事者とその家族の Draw My Life 作成、である。なお、インタビューは当事者とその家族双方を原則としたが、当事者の家族にインタビューの同意を得られなかった場合や既に他界している場合は当事者のみの単独インタビューとした。

2 ワークショップの実施

手順④で作成した Draw My Life を当事者とその家族双方同席のもとで鑑賞するワーク

ワークショップを実施した。調査対象家族に対して結果をフィードバックする事で家族相互に理解を深める効果を期待して設定した。所要時間は、当事者約1時間、家族約1時間の計2時間、当事者単独インタビューの場合は約1時間とした。なお、原則全対象者実施としたが、インタビューイの都合でやむを得ず実施できなかったケースが3例あった。

(2) 対象者

障害種別：知的障害を伴わない肢体不自由当事者とその家族 合計18名（内訳：当事者10名、家族8名）。なお、より多くのインタビューイを確保する目的から障害の受傷経緯や年代を問わない事とした。その結果、さまざまな受傷経緯（先天的：90%、後天的：10%）や年代（20代：

28%、30代：11.1%、40代：11.1%、50代：16.7%、60代：28%、70代：5.6%）の研究対象者にイン

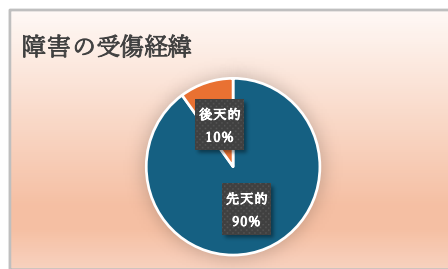


図1 障害の受傷経緯

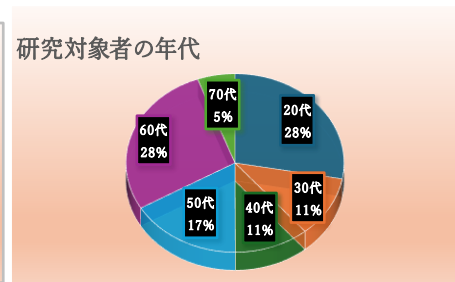


図2 研究対象者の年代

タビューを実施できなかった。また、男女比は当事者7:3、家族0:10であった。

3. 倫理的配慮

研究対象者には、本学会「研究倫理規定」に則り作成した同意書に書面または口頭で同意を得た。記入した同意書は、研究対象者にメール送信、あるいは郵送した。また、筆者もコピーを保管した。本報告に関連し、開示すべきCOI関係にある企業等はありません。

4. 研究結果

自助的自立、依存的自立（古川，2007）の考え方を基軸として、研究対象者の年代を青年・壮年・老年の3つに分けて研究結果の解釈を試みた。すると、年代が若くなればなるほど依存的自立の傾向が強くなり、反対に年輩の方ほど自助的自立の傾向が強くなった。また、Draw My Life映像を用いたワークショップを実施した感想としては肯定的な声が多く寄せられた。「普段言えない事を喋る事ができた」や「互いの意思を改めて確認する事ができた」等はその一例である。

5. 考察

現代における依存的自立傾向の強まりは、時代による社会の考え方の変化を反映していると考えられ、今後も変化していくと想定される。本報告は研究目的である変遷の大雑把な把握にとどまっているため、今後はより詳細なデータ分析・解釈が必須となる。

ワークショップの設定は、当事者、家族相互における「自立観」の客観視を可能にし、認識の一致点の確認、あるいは齟齬を埋める手段として機能した意味で効果的であったと考える。自立観を巡る障害者家族の課題を解決へ導くだろうという可能性が考えられた。